第６章　上黒岩遺跡の石偶・線刻礫と子安貝

1　比較すること

上黒岩遺跡の石偶は，その発見以来，多くの研究者の目をひいてきた。伴出した隆起線文土器に伴う木炭の炭素 14 年代の測定値は 12,400 年B.P.であったから，当然，ヨーロッパの晩期旧石器時代に併行する時代の日本列島のヴィーナスであった。しかし，日本では，土器をもっていることから縄文時代に位置づけ，縄文時代は新石器時代にほぼ相当するという暗黙の了解があったために，上黒岩の石偶はその年代の古さにもかかわらず，海外では周知されるにいたっていない。わずかに，ポール・バーンが「ヨーロッパ外部の更新世の心象」として扱っているていどである［Bahn 1991：96～97］。後期更新世から完新世の年代測定の高精度化が世界規模で進み，比較考古学の基礎が整備されてきた現在，上黒岩の石偶は，その年代にもとづいて系譜を追究し，ユーラシア大陸の旧石器時代のヴィーナスとの比較を進めるなど，これからは正当な扱いをうけなければならない。

上黒岩の石偶には，乳房の表現のあるものと，ないものがあり，その意味についてこれまで議論があった。その違いを，江坂輝彌は女性と小児と考え［江坂 1967：232～233］，芹沢長介は女性と男性と推定した［芹沢 1986：174］。上黒岩の石偶で乳房の表現を欠いた例は，小児なのか，男性なのか，あるいは乳房の表現を省略したのか，これは上黒岩の石偶だけを眺めていても決まるものではない。別の方法，つまりヨーロッパ・ロシアのヴィーナスとの比較という観点をもって考察しないかぎりこの問題は解決しない。

旧石器時代のヴィーナスは，ユーラシア大陸のヨーロッパからシベリアの範囲に分布している。その地域的，型式学的なまとまりを見ると，フランス，イタリア，オーストリア・チェコ，ウクライナ，シベリアの大きく５つの地域にわけることができる。大陸の旧石器時代のヴィーナスのうち，上黒岩の石偶に比較的近い時期のものを見ていきたい。

2　上黒岩の石偶はすべて女性

まず，シベリアのマリタ遺跡の例を取りあげる（図 279－１～12）。グラヴェット－コスチェンキ期のヴィーナスのなかでは，後半の 24,000–22,000 年前頃のものである。

マリタのヴィーナスを，乳房の表現があるものから，ないものへと型式学的に配列してみよう。１～７は，乳房，腕，Ｙ字形に線刻した女性器の表現が明瞭であるが，乳房はすでに小さく膨らみもなくなり，その下の両腕の表現のほうが目立つ。８～11 は，乳房と両腕が一体化して一つの塊状に変化している。そして，12 になると，頭のついた棒状で，頭の表現は髪と顔の表現があるが，乳房と両腕の表現はなくなり下半身にＹ字形の沈線をいれて性器をあらわすだけに変わっている。

その変化は漸移的であって，立体感が失われ，簡便化していく過程である。乳房の表現のあるなしは，女を表現するときの決定的な要素ではないことがわかる。しかし，女性器だけは一貫してＹ字形であらわしており，女性像であることを明示している。

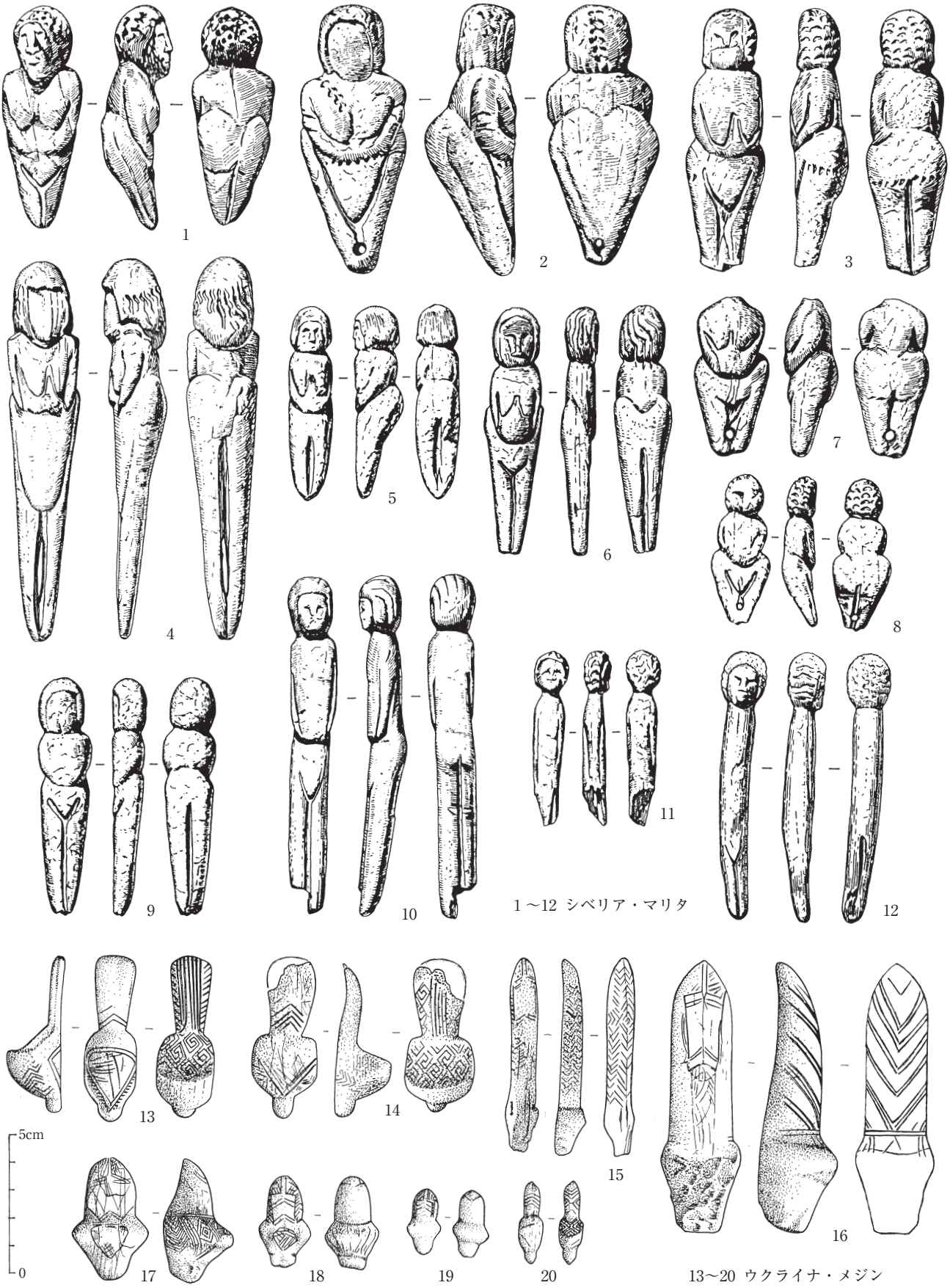


図 279　シベリア・ウクライナの後期旧石器時代中頃と後半のヴィーナス

［Abramova 1967，Müller-Karpe 1967］（15・16 の右端は写真から春成作図）

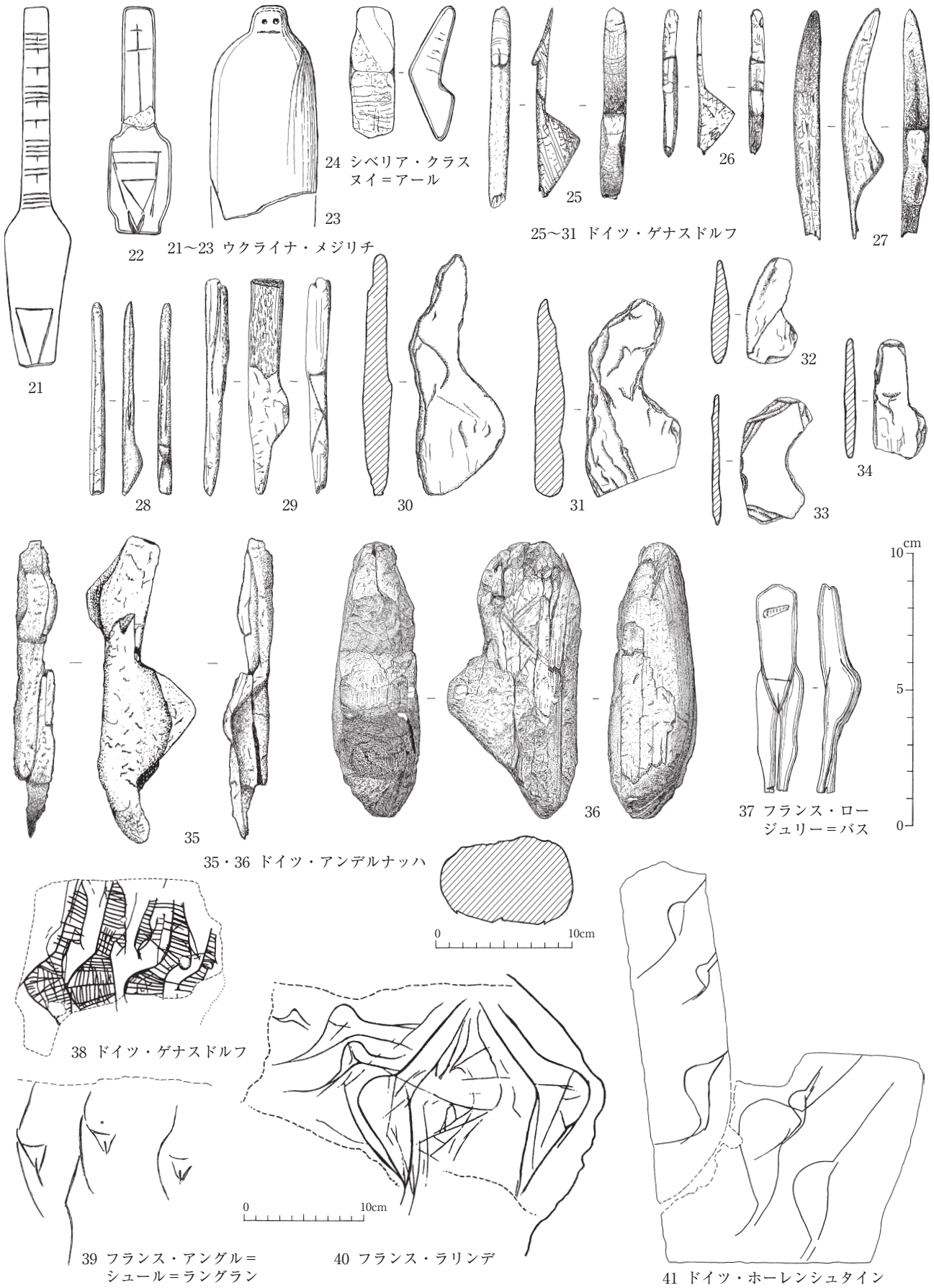


図 280　ウクライナ・シベリア・ヨーロッパの後期旧石器時代後半のヴィーナス

38・40・41 線刻石，39 洞窟壁画［Höck 1993, Bosinski 1991］（21～24・37・39 は春成作図）

なお，２・７・８の例は，足の部分に孔をあけてあり，護符のように身に着けたのか，それとも使わないときにどこかにかけておいたのか，この時期以降のヴィーナスの使用法を考えさせる。

オーリニャック期～グラヴェット期（約30,000～21,000年前）のヴィーナスは，ソリュートレ期（約22,000年～18,000年前）を迎えると，西・東ヨーロッパでは，いったんその歴史を閉じる。洞窟壁画を描くこともなくなる。そしてその後，マドレーヌ期（約18,000～12,000年前）にもう一度ヴィーナスが現れる。洞窟壁画も復活する。しかし，マドレーヌ期に再登場したヴィーナスは，グラヴェット期のものとまったく違う形である。

ウクライナのメジン遺跡は，ヨーロッパのマドレーヌ期に併行する時期の遺跡で，そこからは多数のヴィーナスが見つかっている（図279－13～20）［Abramova 1967：148］。Z.A.アブラモワが1962年にロシアの旧石器時代芸術についての総括的な論文を発表したときは，天地逆にして，空を飛ぶ鳥だと考え，あるいは男根としたけれども，1965年にI.G.ショフコプリヤスがこれらをいずれも女性像とみなして以来，ヴィーナス説が定着した。メジンのヴィーナスの半身は著しく扁平で，いずれも乳房の表現はない。下半身は尻が後方に大きく三角形に突出している。腰の正面には，性器を表現した逆三角形の線刻表現が著しい。そして，メジンのヴィーナスのなかでは大型品に属する13・14・17には，逆三角形の両側に羽状文を線刻してある。15～19の正面上部に線刻した船の帆をかけたような表現は，顔をあらわしているようである。そして，13・14・16の背面の縦線またはV字形の表現は，髪を象徴的にあらわしているとすれば，上黒岩で髪を重視していることと共通する。

ドイツのゲナスドルフ遺跡は，ヨーロッパのマドレーヌ期に属し，この時期の代表的なヴィーナスが発掘されている（図280－25～31）。大多数はマンモス象の牙製品で，頭部はほっそりと尖っており，人の頭の表現はまったくなく，正面からみると，細い棒状であって，人の形象品にはみえないけれども，側面からみると腰を三角形にあらわして女性らしさを強調している。乳房を表現したものと，そうでないものがある。乳房の表現は腰にくらべると小さく，石板や洞窟に線刻したヴィーナス像もばあいも，腰と女性器を表現するのはごく普通であるけれども，乳房の表現は必須ではなく，しばしば省略している。この様式のヴィーナスをG.ボジンスキーはゲナスドルフ型ヴィーナスと命名している［Bosinski 1974, 1991, Höck 1993］。約16,000～15,000年前のヴィーナスである。ヨーロッパの同時期の洞窟壁画のヴィーナスも，側面形が主になっているから，両者には通底する意味が込められているのであろう。

ゲナスドルフ型のヴィーナスは，ウクライナから西ヨーロッパの地域まで分布している（図281）。しかし，グラヴェット－コスチェンキ期のヴィーナスからマドレーヌ期のゲナスドルフ型への変遷を現状では説明することはできない。グラヴェット期最後のドルニ＝ヴェストニッツェやマリタのヴィーナスの最終形態と，マドレーヌ期のメジンやゲナスドルフのヴィーナスとは，形態的にはつながりがないので，１度消滅したあと，マドレーヌ期にふたたび出現した可能性はつよい［春成2007：61］。

上黒岩の石偶では，乳房の表現の有無が男性または小児か，女性かの問題を引き起こした。ここで，上黒岩の石偶13点を乳房の表現のあるものから，ないものまで順番に配列してみよう。そのさい，石偶の高さを揃えて５段階の目盛のなかにいれて，髪，腰のスダレ文や鋸歯文の位置をそれ

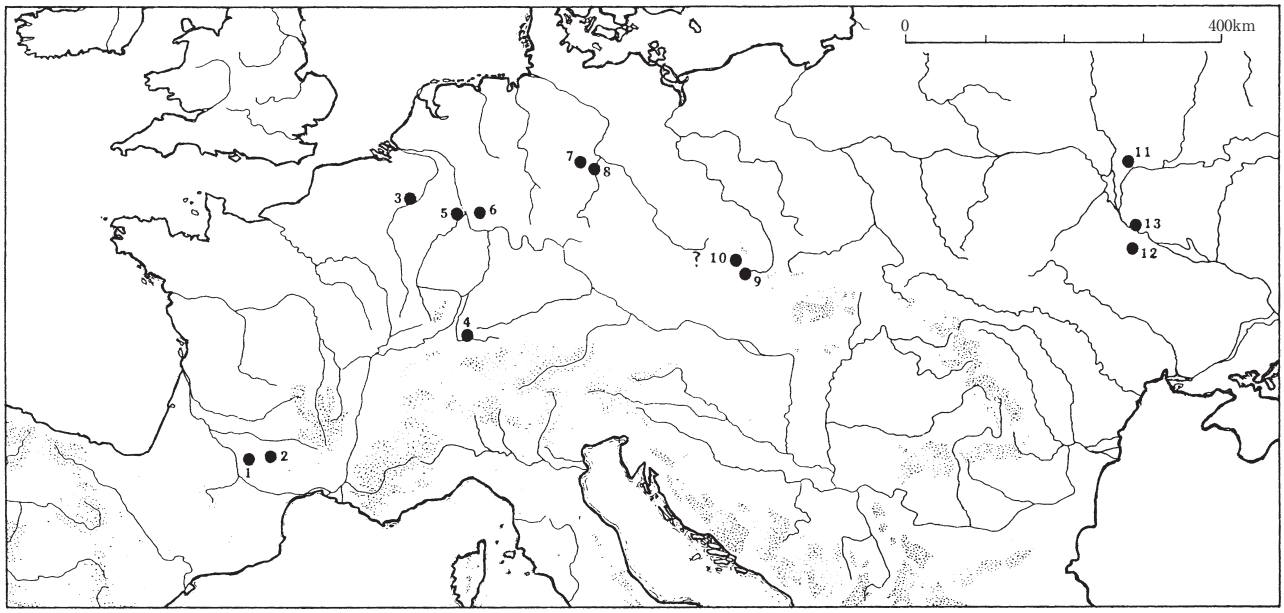


図 281　ユーラシア大陸の後期旧石器時代後半のヴィーナスの分布図［Bosinski 1991］

1 クールベ，2 フォンテーユ，3 アブリ＝ド＝メガルニ，4 ペテルスフェルス，5 アンデルナッハ，6 ゲナスドルフ，7 ネブラ，8 エルクニッツ，9 ペカルナ，10 ビチ＝スカラ，11 メジン，12 メジリチ，13 ドブラニチェフカ

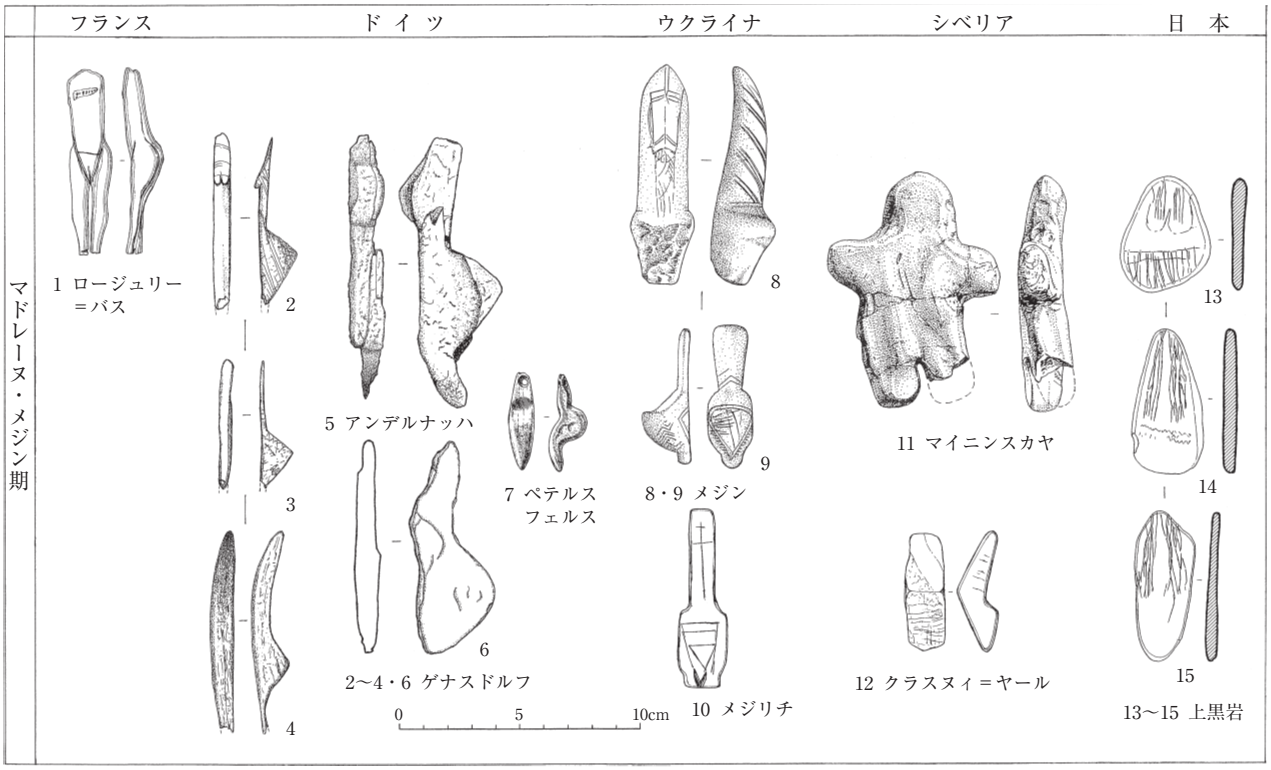


図 282　後期旧石器時代後半のヴィーナスの型式変遷

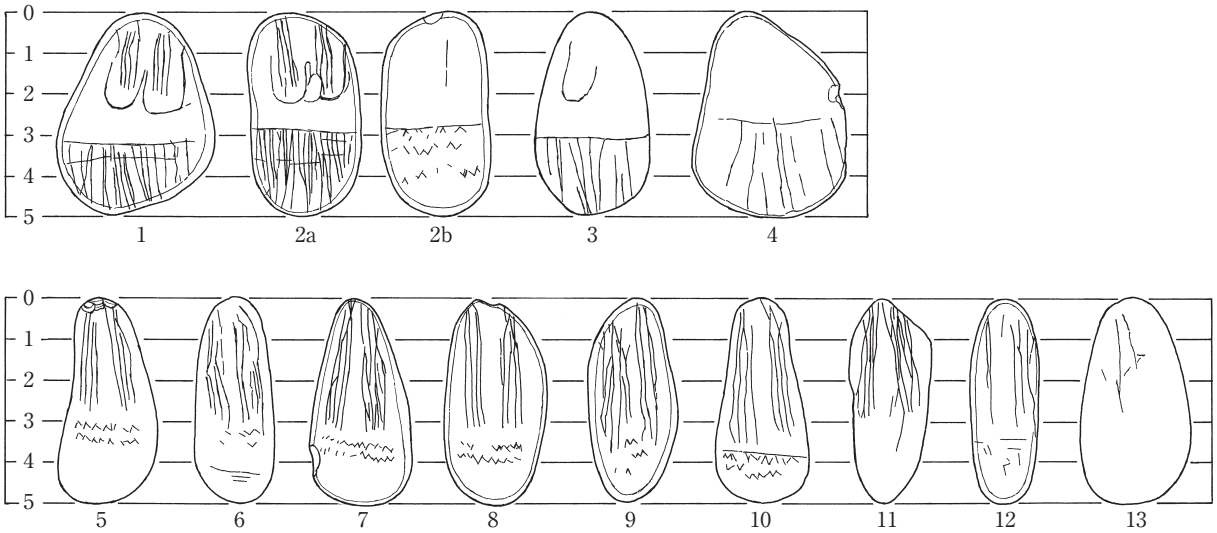


図 283　上黒岩遺跡出土石偶の線刻比較（高さを統一）

ぞれ比較してみることにしたい（図 283）。

最初に簡単に整理しておくと，乳房の表現があるのは 3 点，腰にスダレ文をもつのは 4 点，腰に鋸歯文をもつのは 7 ～ 8 点，肛門をあらわしているのは 2 点である。

髪をあらわしているのは 11 点である。石は楕円形のものを選び，上が細く下が太くなるようにして上下を決めている。

乳房を線刻した石偶は計 3 点，髪の長さは 2，乳房は 2 ～2.5，腰の横線は 3 の位置にある。うち 1 点は，裏面の 3 の位置に腰の鋸歯文を施している。裏面は表面よりも全体的に磨滅しているので，最初に裏面を用い，のちに表面に新たに線刻して再生したと考えておく。そう考えると，腰のスダレ文も鋸歯文もほとんど同時に存在したことになる。しかし，多用されたのは鋸歯文のほうであった。

乳房の線刻のない石偶のうち 9 点は，一括りすることができる。その特徴は髪の長さが 2.5～ 4 で長いこと，腰の鋸歯文が 3 ～ 4 の位置で低いことである。髪が 2.5 の例は鋸歯文の位置も 3 で高いのにたいして，髪が 3.5 の例は鋸歯文の位置は 4 で低い。そして，髪だけを線刻した例では，髪はほぼ 3 の位置にある。これを，髪が短く腰の鋸歯文の位置が高いものが古く，髪が長く腰の鋸歯文の位置が低いものが新しい傾向をもっている，と筆者はみたい。髪の線刻の本数が少なく，腰の線が不明瞭あるいは省略したものは，もっとも新しく，この次に線刻をすべて省略したものがつづくことを予想させる。

このように，上黒岩の石偶を相互に比較し，簡略化の傾向をうかがうことができること，この時期の大陸のヴィーナスにも同様の傾向を認めうることから，乳房の表現がないことを理由に大陸のヴィーナスおよび上黒岩の石偶が女性であることを否定することはできない。上黒岩の石偶のうち，髪だけをあらわしている例も，女性とみて間違いないというのが結論である。

つぎに，下半部のスダレ文と鋸歯文について考えてみたい。

スダレ文をもつ石偶は 4 点ある。礫の中央または若干下よりに，横に 1 本線を引くと，礫の下半

部の輪郭と合わせてできた半円形の区画のなかに多数の線をスダレ状に垂下させてその空間を塡めていることになる。

鋸歯文の線刻をもつ石偶は７点ある。中央またはかなり下よりに横に１本線を引いて半円形の区画をつくったあと，その下に２～３本の鋸歯文を描いたものと，横線をいれることなく２本の鋸歯文を描いたものがある。

上黒岩と同じ時期のヴィーナスの分布の東限は，大陸ではシベリアで約 15,000 年前にマイニンスカヤの土偶が知られている（図 282－11）。乳房も女性器も表現していないが，正面型である点だけは上黒岩と共通している。上黒岩の石偶は大陸と関係があるとすると，現在知られている資料とは 30,000 km以上離れている。その間になんらかの関係があるとすれば，もちろん直接的ではなく，隣同士が連鎖的に交流しながら，シベリアと日本列島がつながっているということになろう。

3　線刻の意味

上黒岩遺跡の第６層，約 12,000 年前の草創期末の無文土器の層から出土した線刻をもつ細長い棒状の石（長さ 24.4 cm，幅 6.3 cm，厚さ 3.0～2.8 cm）も，他に例がない興味深い資料である（図 209－１）。石は硬質でずっしりと重い緑色片岩の一種の円礫で，やや扁平な面の片面に細かな鋸歯状の線による文様（羽状文）を縦に３～４列にわたって彫ってある。一見，男根を連想させる形状の石であるけれども，円みは少し足りない。線刻は片面だけであるので，使用にあたっては上下あるいは表裏の区別が存在したのであろう。

第９層から小型の線刻石偶が 13 点，第６層からは大型の線刻礫が１点だけ出土していることから推定すると，第９層の時期が１人で１個の石偶を用いていたのにたいして，第６層の時期には何人もの人が１個の線刻礫を交代で使っていたということであろうか。

同じようなハ字形を連ねた羽状文をマンモスの骨に彫った例は，チェコのプシェドモスティ遺跡（後期旧石器時代）から見つかっている（図 284－２～４）［Breuil　1924：535，541，542］。そのうち肋骨の１例（同－２）は現存長 24 cm，径 4.8 cmであるから，上黒岩例とくらべると，太さはほぼ同じで，長さはもっと長いらしい。羽状文は横方向の帯状にして，それを片面は 39 段以上重ねて施し，もう片面は半分を横方向に 17 段重ね，のこりの半分は縦方向に７列（以上）並べており，線刻はきわめて精緻である。他の２点も，基本的な構成は同じである。いずれも曲った棒状であって，上黒岩例と同様，男根形を呈しているともいえる。プシェドモスティ遺跡はパヴロフ文化（約 23,000～21,000 年前），つまり東ヨーロッパのグラヴェット期後半の文化に属しているので，上黒岩遺跡とは年代がちがうし，チェコと日本とでは途方もなく距離が離れているから直接つながるということはありえない。

同じプシェドモスティ遺跡からはマンモスの牙に女性像を線刻した，線刻ヴィーナスも出土している（同－１）。牙の曲った形は，やはり男根形である。頭・胴・尻をあらわし，横長の楕円形を描いて腰をあらわし，そのなかを横方向の羽状文でうめている。さらに楕円形の下部は短い羽状文をいれている。楕円形を腰とみれば，上の羽状文は陰毛，下の羽状文は陰裂をあらわしているように見える（上は陰裂，下は肛門をあらわしている可能性も考えられるけれども，ここでは採らない）。そ

うすると，同じような羽状文を全面に彫ったさきの骨製品も，陰毛または陰裂の表現をくりかえすことによって女性器を強調表現したものであって，象徴化が極端にすすんだヴィーナスとみることも可能であろう。旧石器時代人が，ヴィーナスのもっとも重要な要素を性器であると考えていたことは，洞窟壁画や岩塊のなかに三角形や楕円形で性器だけを表現した例が少なくないこともその証拠になる。

羽状文をいれたヴィーナスというと，旧石器時代ではウクライナのメジン遺跡にいくつかある。「性的三角形」を線刻し，その左右に羽状文を展開した例（同－6），上半身を羽状文が1周している例（同－5）がそれである。この羽状文が一定の具象性をもつとすれば，陰毛でしかないだろう。世界のヴィーナスには羽状文をしばしば使っている。A.E.ストリヤルはV形の刻線は女性のシンボルであるといい，Ⅰ.ショフコプリヤスはメジン遺跡のヴィーナスにみる羽状文（モミの葉状文，山形文あるいはジグザグ文）をV形文のコンビネーションであって，それは女性のシンボルの展開であると主張している[(1)]［ビビコフ（新堀ほか訳）1985：139～140］。

同じくメジン遺跡からはマンモス象の肩甲骨に羽状文を赤色顔料で描いた例が出土している（同－7）。これには肩甲下窩に径16 cm×18 cmの敲いた痕跡がのこっており，マンモスの牙製の拍子木で連打したものとS.N.ビビコフは解釈し，打楽器として使ったと推定している［ビビコフ1985：68～72］。肩甲骨は，自然状態ですでに「性的三角形」を呈しているので，それに羽状文を加えて陰毛をあらわすことによって，この肩甲骨を女性器の象徴として完成したもので，これを用いて発する音は女性とのかかわりをもっていた可能性がある，と筆者は考える。

羽状文の意味がわかりやすい例は，地中海東端の新石器時代のキュプロス島のキプリオット出土の土偶（後期キプリオットⅡ，前1,450－1,200年）である（同－11・12）。複数の沈線で逆三角形を描き，そのなかを羽状文でうめている。一見，パンツ風であるが，陰裂を凹んだ穴で表現しているので，このばあいは羽状文は陰毛を強調した表現とみるほかないだろう。時代や地域を超えて，陰毛を羽状文で表現する，あるいは陰毛を表現することによって女性器をあらわすという心理は共通している。

古代オリエントの地母神は豊饒のシンボルとして，母性の豊かさを示す乳房とともに，成熟した女性を示す陰毛をあらわしたことを木村重信は指摘し，陰毛と陰裂とを組み合わせて「性的三角形」をつくることがあると述べている［木村1994：92］。ここに図示した例（同－13・14）は，羽状文ではなく縦の短線を2段と9段に重ねている。

以上のようにユーラシア大陸のヴィーナスを瞥見したあと上黒岩に戻ると，第6層から出土した線刻礫の羽状文も，女性器の象徴的な表現のように思えてくる。その一方，この線刻礫はプシェドモスティ遺跡の諸例と同様に，男根の形を連想させる棒状の素材を選んでいる点にも注意の目を向けたい。縄文前期の群馬県富士見村陣馬遺跡出土の女性器をあらわした小円穴をもつ石棒や，縄文中期の北陸地方で発達した女性器を彫刻した石棒［春成2007：123］の存在を知っているからである。上黒岩遺跡の線刻礫については，男根形に女性器の象徴を彫り込むことによって男女の交合を象徴的に表現し人の生誕とかかわりをもつ遺物であった可能性を追究する必要があろう。

上黒岩の第9層から出土した石偶の腰のスダレ文は，発見当初から「腰蓑状の衣類」の表現と解釈され［江坂ほか1967：232～233］，現在にいたっている。そこで，筆者は，同じ上黒岩から出土し

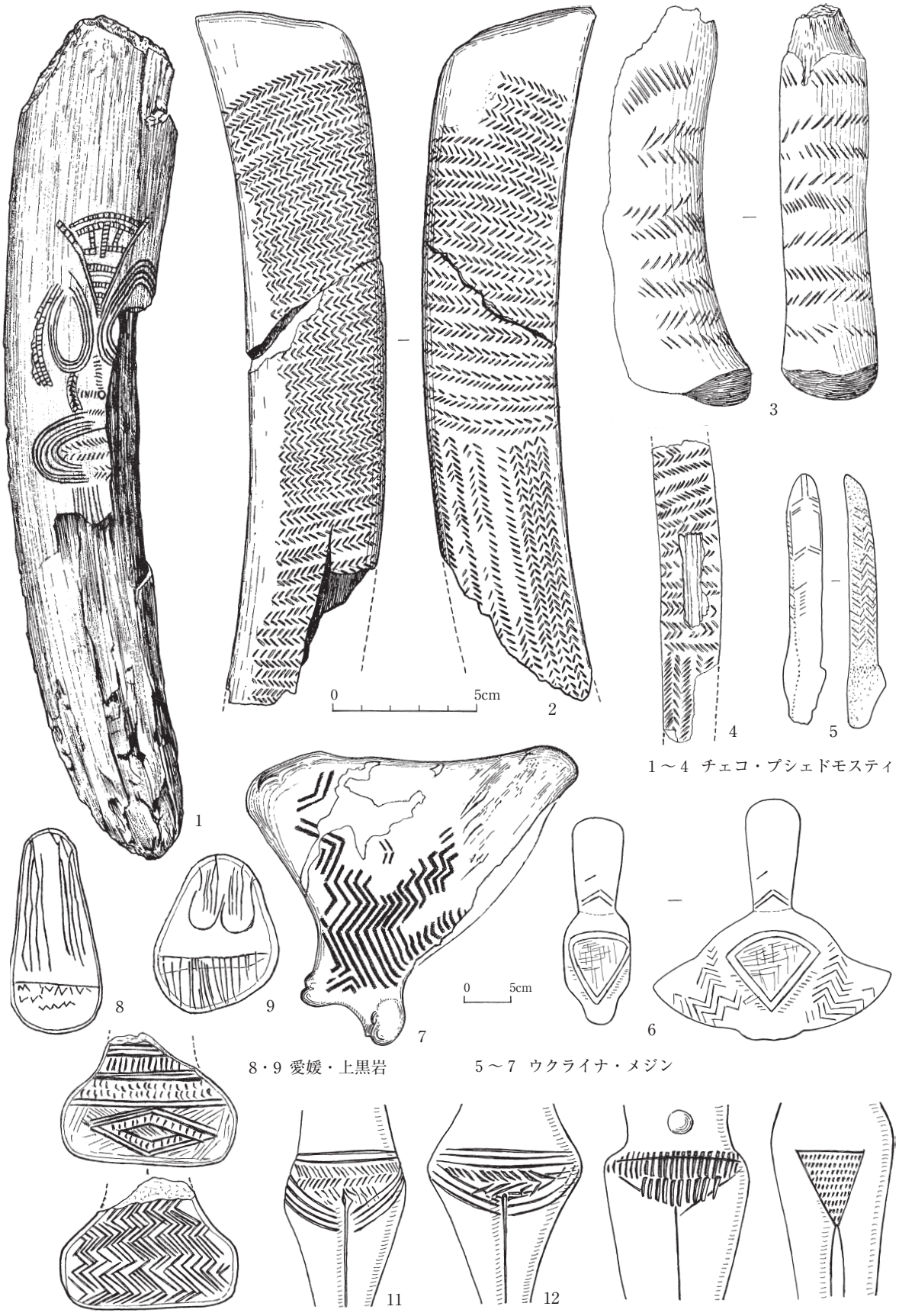


図 284　後期旧石器～新石器時代の羽状文の類例

［Müller-Karpe 1966, Breuil 1924］（８～14 は春成作図）

た石偶の腰の横鋸歯文については，丈が短いことから前者と区別するために「腰巻」の可能性を考えたことがあった。しかし，旧石器時代のヴィーナスで腰蓑や腰巻を表現した例は皆無であるので，はたして上黒岩の石偶だけが例外といえるかどうか，問わなければならなかった。

そこで，上黒岩の石偶１～４の「腰蓑」を見直すと，縦方向の線をたくさん描いている円礫の下半部全体を「性的三角形」の表現と解釈しうること，そして縦線を描く前に，横方向に１～２，３本の直線を描いていることに気づく。特に，石偶２が，鋸歯文を描いている面を最初に使い，のちに裏返してスダレ文を描いたとみなしうることは重要で，横直線が「性的三角形」の上辺で，スダレ文と鋸歯文は表現の形は異なるけれども同じ意味をもっていると解釈すべきことを示唆している。

上黒岩の石偶に「性的三角形」の表現を認めることができるならば，これまで「腰蓑」とされてきた下半部をうめる縦線は陰毛の表現でしかない。メジン遺跡や新石器時代の地中海沿岸のヴィーナスと同じように，上黒岩でも陰毛を描くことによって成熟した女性を象徴しようとしたと理解しておきたい。そして，横方向の鋸歯文の意味についても，陰毛の表現と筆者はみる。たしかに陰裂を横長の菱形にあらわしたらしい例は，関東地方縄文早期の三戸式の時期の土偶にみることができる（図284－10）。陰裂が横方向というと不自然ではあるが，上の口が横であることから，下の口も横でもよいということかもしれない。しかし，2bが鋸歯文を３段に重ね，下半部の大半をうめている事実は，やはり陰毛をあらわしているとみるのが自然であって，ユーラシア大陸の羽状文と同じとみるべきであろう。ちなみに，20世紀のＡ．モディリアニやＰ．ピカソが描いた線画でも，陰毛は波状文ないし連弧文を重ねて表現しており，鋸歯文の変異とみることができる。

さて，上黒岩の石偶はすべて石で作ってある。上黒岩を発掘したのは1961年から1970年まで，今から35年以上前になる。それ以降，上黒岩と同じ縄文草創期の遺跡はたくさん発掘された。しかし，石偶は他のどこからも出ていない。上黒岩の石偶は日本のなかでは孤立している。なぜ，ここにのみ存在するのか。上黒岩の岩陰に文化的にまったく孤立した集団が１年を通して定住していたとは考えにくく，おそらく冬の寒い時期は山の下に降りているとすれば，平地の遺跡から同じような石偶が出てきてもおかしくはないが，実際には見つかっていない。

石製品であるから，腐蝕して消滅することはない。骨牙製品が普通で，上黒岩の石偶は珍しくも石製品であったので，今日までのこったということであろうか。それにしても１点や２点は他の遺跡からも出土してもよいのではないかといいたくなるけれども，長崎県福井洞窟の有孔円板（石製の２点と土器片製の１点）も，類品は宮崎市上猪ノ原遺跡以外には出土していない。事情は十分に説明できないけれども，上黒岩岩陰と厳密な意味での同時期の遺跡がまだ見つかっていないために，第２，第３の例が出土していないという事情もあるのだろうか。

なお，日本のヴィーナスあるいは線刻礫と呼ばれる遺物は，後期旧石器時代の例として東京都小平市鈴木遺跡（推定ナイフ形石器の層），鹿児島県財武町耳取遺跡（剥片尖頭器に共伴），縄文時代の例として埼玉県富士見市水子貝塚（縄文前期），高知県西土佐村大宮遺跡（縄文後期）の出土品が知られている（図285）。それぞれ１点ずつで，時期もとんでおり，上黒岩例も含めて，それぞれの間の関係は不明である。また，何を表現しているのか，判断は容易でない。

世界的にみると，ヴィーナスはマンモス象の牙や石で作るのが普通である。上黒岩の石偶の形状を参考にすると，日本では，動物の骨を割って平たい破片を楕円形に加工してヴィーナスを作って

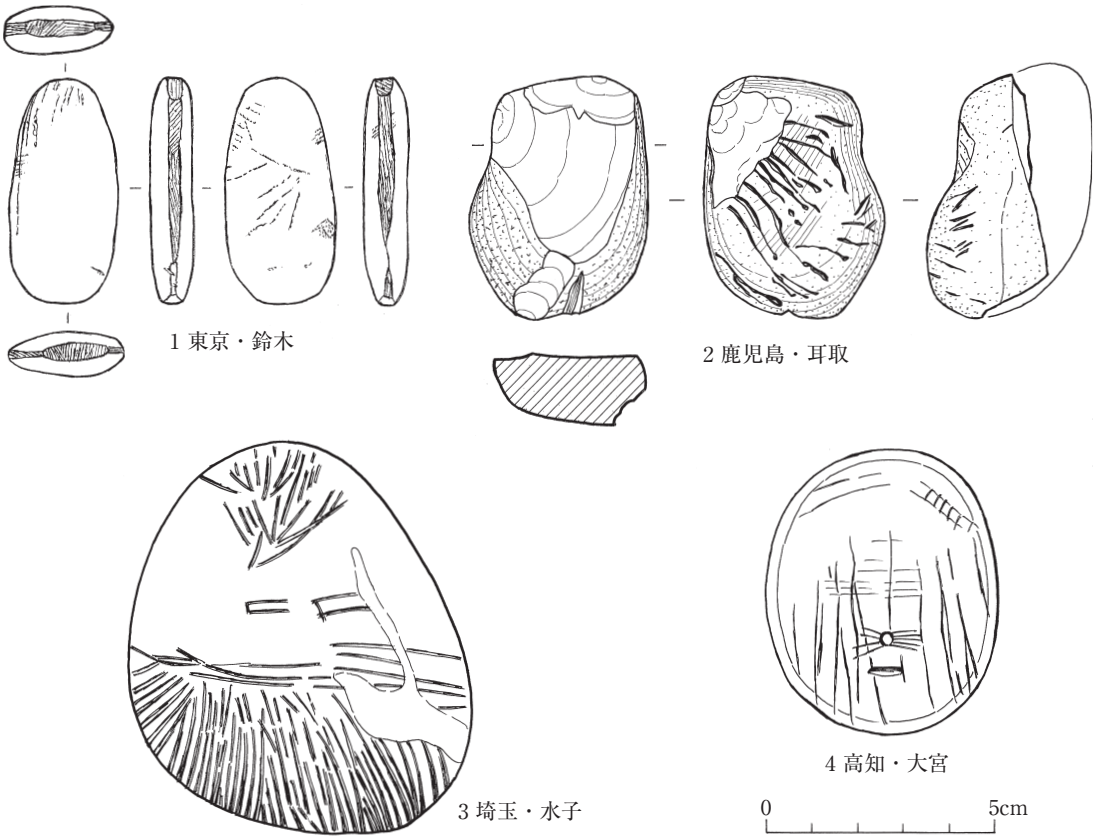


図 285　日本の諸遺跡出土の線刻礫

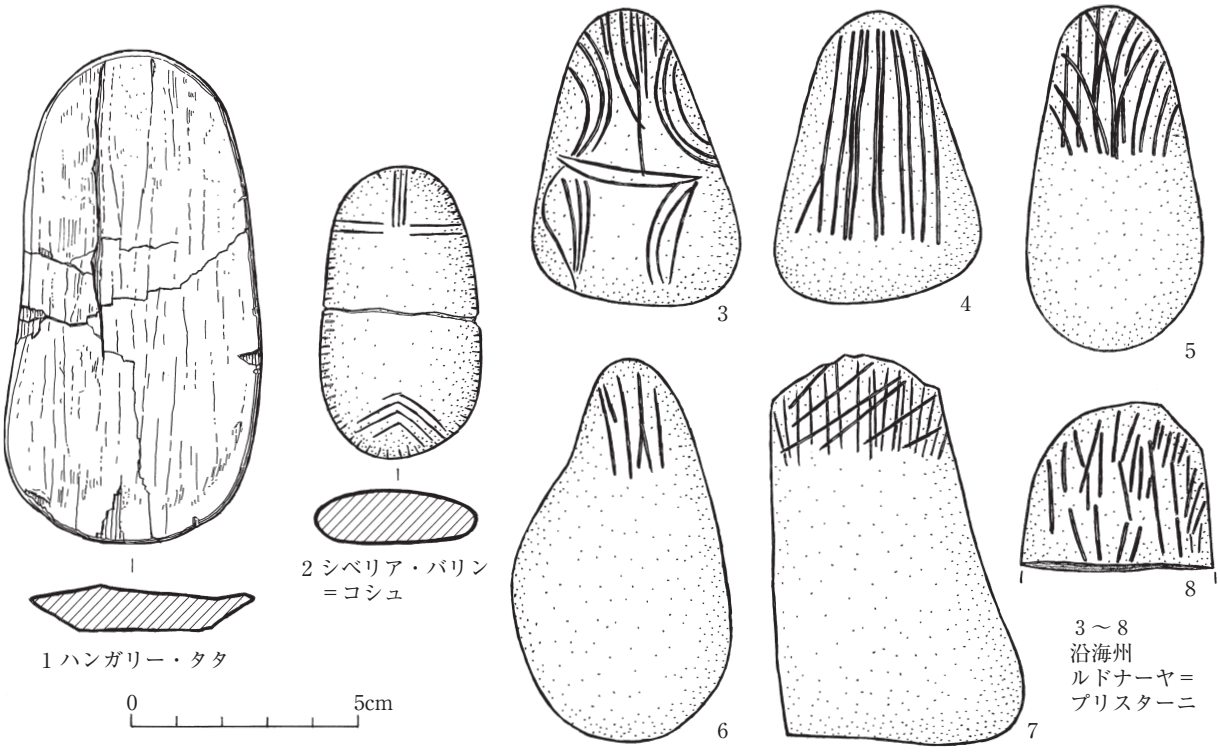


図 286　ハンガリー出土の象牙製の楕円形板，シベリア・沿海州出土の線刻礫

［Müller-Karpe 1966, Abramova 1967, Крупянко, и Табарев 1996］

いたのであろうか。マンモス象の牙を加工した楕円形の円板はハンガリーのタタ遺跡から出土している（図286－1）。旧石器時代～縄文草創期の日本列島に骨角牙製のヴィーナスは存在したけれども，土壌の酸性がひじょうに強いので，それらは溶けて消えてしまった。しかし，上黒岩では骨を石に置き換えて作ったので今日までのこった，というのが真相であろうか。今後の発見をまって判断するほかない。

線刻礫の類例は，大陸側では旧石器時代にはシベリアのバリン＝コシュ遺跡から出土している（同－2）［Abramova 1967：158］。図に示したように上下をおくならば，顔と女性器を表現しているのであろうか。

また，上黒岩よりも時期は少し新しいけれども，沿海州の早期新石器時代のルドナーヤ＝プリスターニ（テテューヘ）遺跡から直径6～9cmの小さな礫で作った「彫刻もしくは装飾品」が26点出土している（同－3～8）［Крупянко и Табарев 1996：69］。自然の楕円形もしくは亜三角形の礫の形はそのままにして，縦の平行線，網状，アーチ状など単純な図像から複雑な図像まで線刻している。これらの線刻礫の天地は図像の解明ができていないので，線刻を上にもっていく案と，下にもっていく案がありうる。ここでは，線刻が石の縁まで鮮明におよんでいるらしいことから，線刻のあるほうを上にして，石がふくらんでいる方を下においてみよう。

3は，表裏に線刻したもっとも複雑な構成をもっている。表は，逆T字形の線を上下を区分し，上の中央に4本の少し長い線と2本の短い線でV字形をつくる。そして左右にそれぞれ3本の弧線でハ字形を描いている。下は1本の水平の直線の下に1本の弧線を垂らし左右にそれぞれ3本の弧線を描いてアーチ形をつくっている。裏は，上端から10本の長い線を垂下している。4は，上方ないし右上方から中央に向かって11本の直線ないし弱弧線を下ろし，さらに左上方から4本の弧線をおろしており，一部重なっている。5は4～5本の短い直線を下に向けておろしており，4の簡略形のようである。6も上方から17本の直線をおろし，右上方から左下に向かって6本の直線を下ろしており，両者は完全に交錯して，斜め格子になっている。4と同じ類型かもしれない。7は下半分を欠損しているらしい。上方から短い直線をおろしていることはかわりないが，4や5が乱れたようになっている。

これらの線刻礫を何とみるかが問題である。礫の大きさは上黒岩とほぼ同じで，楕円形の一端に長軸に並行に4～17本の線刻をもつ細長い礫は，上黒岩にかなり近いといってよいだろう。上黒岩では，女性の髪または陰毛であったけれども，この遺跡の縦線刻は何をあらわしているのであろうか。

3の表現にやや類似する例がウクライナのメジン遺跡出土の旧石器時代ヴィーナス（図279－15・16）である。メジンのヴィーナスでは，線刻の下部の逆三角形が女性器であることは明らかであるので，上半部の船の帆形は頭の輪郭と眼・口の抽象的な表現であると筆者は推定する。3の裏面は，メジン遺跡の例を参考にすれば，髪の表現でよいだろう。裏面を髪とみれば，表の門形は女性器，上部左右の弧線は乳房または腕，頂部のV字形は髪をあらわしている可能性がつよくなる。4～7は3の図像を参考にすれば，やはり髪の可能性がもっともつよいだろう。

このように，ルドナーヤ＝プリスターニ遺跡の線刻礫は，髪と女性器を表現した女性像と髪の表現だけになった女性像とみなし，ユーラシア大陸の旧石器時代ヴィーナスの後裔であると筆者はみ

たい。線刻礫は地域と時期を問わなければロシアではアンガラ川の水源付近，ミヌシンスク盆地（カラスク文化）でも見つかっている［Aceев 1998］このような資料が大陸にはまだ多数埋もれており，時間的にも長期に及んでいる可能性を考えておくべきであろう。

隆起線文土器・部分磨製石斧・有茎尖頭器，矢柄研磨器のあり方からすると，上黒岩遺跡は隆起線文土器の時期の東日本系文化の西の端に位置する。すなわち，この時期の文化要素は東から西へと伝わっていったと理解するならば，上黒岩の石偶もけっして孤立した例ではなく，東日本から伝わってきた要素であって，さらにはユーラシア大陸とのつながりをもっていることを暗示しているようにみえる。

4　石偶から子安貝へ

旧石器時代のヴィーナスの用途については，「人間や動物の繁殖や生殖に関係のある偶像あるいは護符」（O.メンギーン，S.ギーディオン，木村重信，江上波夫），種族・血族の祖母神（P.P.エフィメンコ，F.ハンチャル），家あるいは家族の守護神（J.マーリンガー），炉の守護者（トーカリョフ）など，さまざまの説がある。しかし，どの説も証明は難しい。

上黒岩の石偶は高さ４～６cmとひじょうに小さいものである。また，石の輪郭はわかるけれども，刻んである線は細く浅いからほとんど見ることができない。丸い石を拾ってきて彫った時だけは石の削りカスが粉となって線の中に残っているのでわかるけれども，水で洗ってしまい，長い間使っていると土で擦れ，さらに汚れて線刻がわからなくなる。しかし，それでもヴィーナスであった。人間は，シンボリックなものを作るときはその時に生命を吹き込み，そして，一旦できあがってしまえば，そのように見える，見えないと関係なく，それを信じることができれば，それで十分であった。観賞することを意識して大きいものを作る必要はなく，役に立ちさえすれば小さなものでもかまわなかったのである。しかし，それにしても上黒岩ヴィーナスは小さすぎる。

しかし，ユーラシア大陸の旧石器時代のヴィーナスもまた，高さが４cmから15cmくらいで，きわめて小さいのが特徴である。グラヴェット期の小型で丸彫りのヴィーナスは，「それを握る手にぴったりと合っていた」ことをS.ギーディオンは指摘している［ギーディオン（江上・木村訳）1968：437］。つまり，ヴィーナスは握りしめるのに相応しい形・大きさになっているのである。

上黒岩の石偶の後，土偶が出現する。その最古例は三重県粥見井尻から出土した土偶で高さ6.8cm，縄文草創期後半に属する。関東地方の縄文早期初めの土偶のなかには，千葉県上台から見つかった高さが僅か2.4cmの例がある。茨城県花輪台貝塚の土偶も高さは５cmほどで，すべて小さいのが大きな特徴である。上黒岩の石偶の使い方は伝統としてのこっているのであろう。

上黒岩で石偶が存在するのは縄文草創期の隆起線文土器を含む第９層～第６層であって，そのうち確かに第６層といえるのは12の１点だけである。そして，その上の縄文草創期の無文土器を含む第６層から線刻した石の棒，縄文早期の押型文土器を含む第４層から子安貝（タカラガイ）が見つかっている（図211－１）。子安貝が存在する意味はひじょうに重要である。

人類が子安貝に注目した最古例は，フランスのアルシー＝シュール＝キュールで見つかっている（図287－５）。旧石器時代後期のグラヴェット期で，子安貝の殻を採集して，その殻頂をこわして

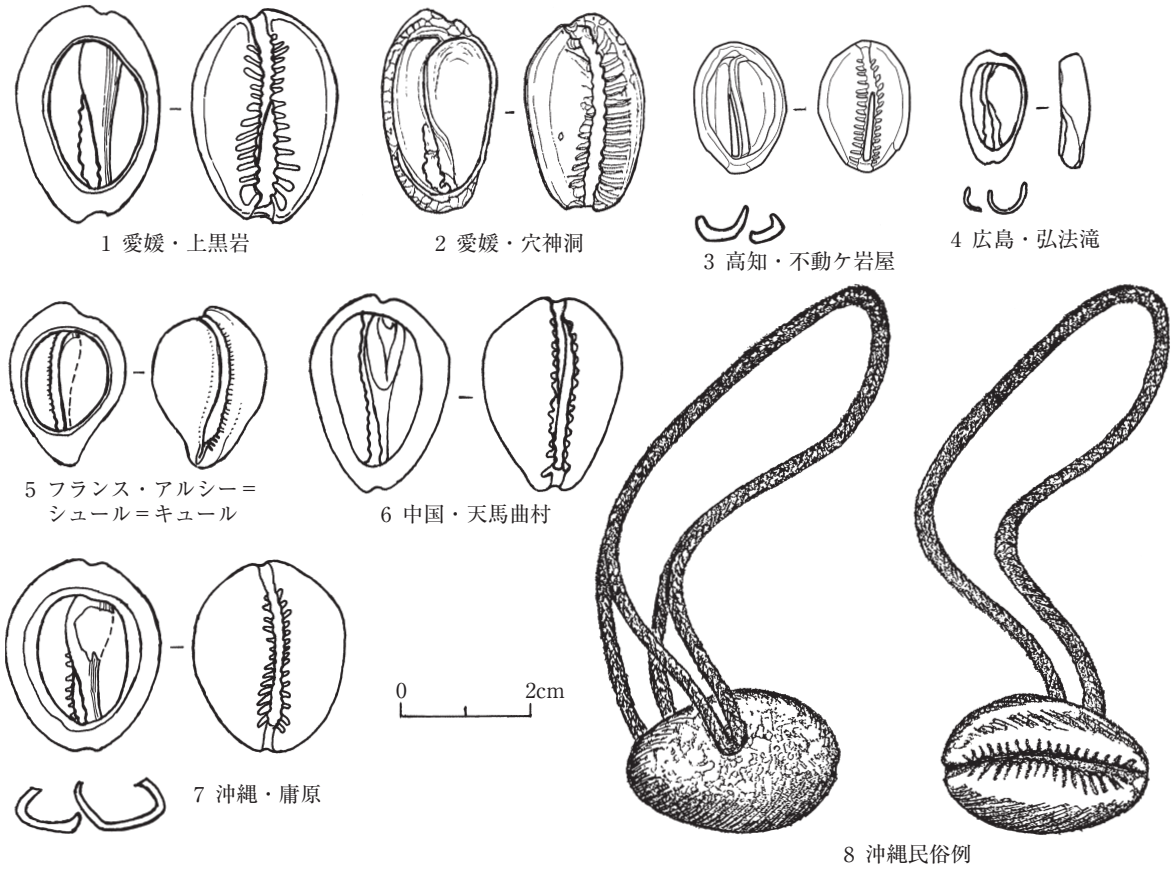
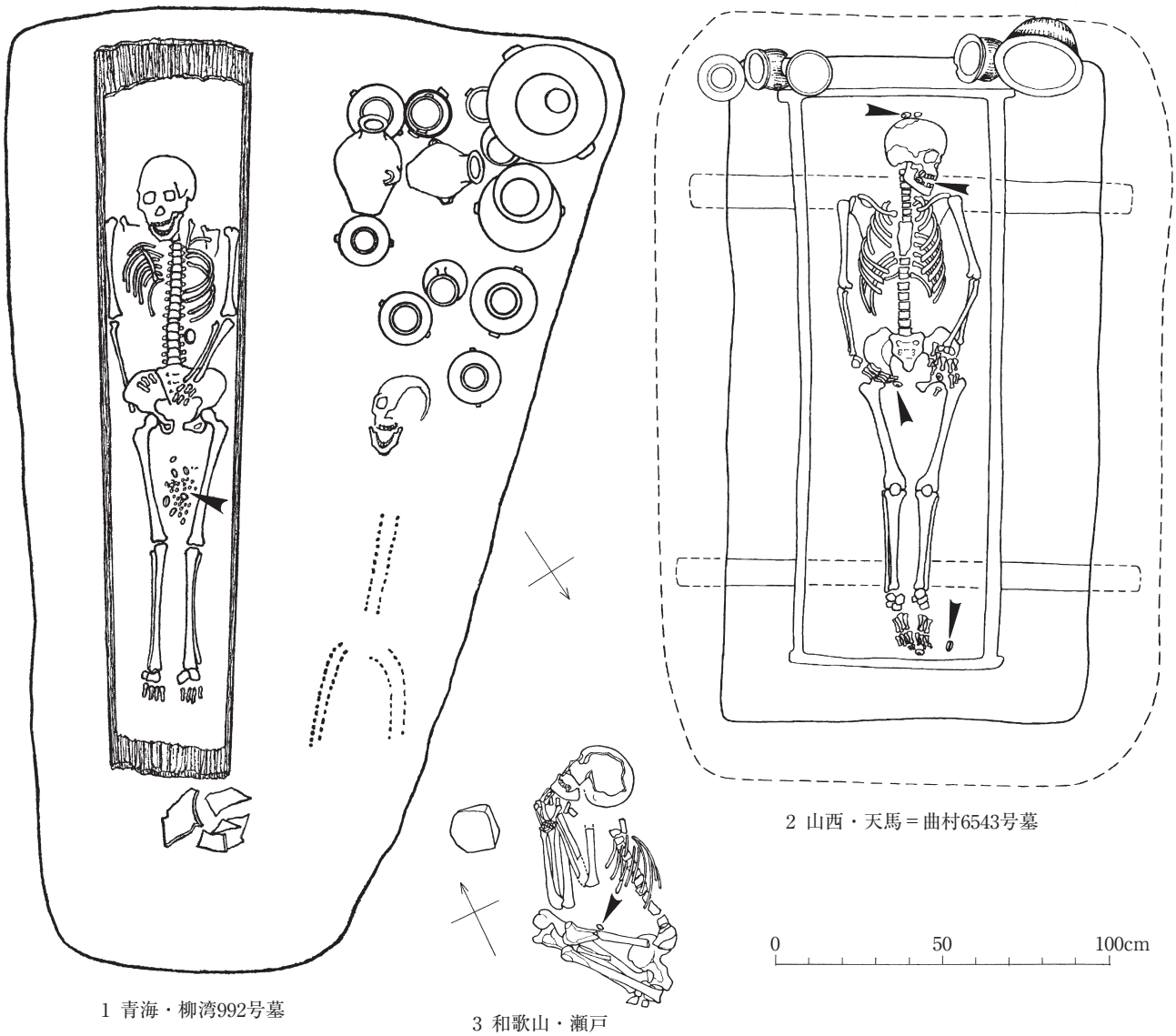


図287　子安貝の加工品と民俗例

いる。旧石器時代例は，フランスのロージュリー＝バス，イタリアのグリマルディでも知られている。A.ルロワ＝グーランも，旧石器時代人は子安貝を女性器のシンボルと意味づけていたと考えている。そして，洞窟壁画の女性表現と同一のシンボリズムの存在を指摘している［ルロワ＝グーラン（蔵持訳）1985：72，75］。子安貝の殻頂の加工は，上黒岩以降の縄文時代や近世の沖縄の例，中国の新石器時代の例と変わるところはまったくなく，世界的な普遍性をもっている（図287）。子安貝の口は，ギザギザになっている。このギザギザの開口部が，陰裂（ヴァギナ）に似ていることから子安貝を女性のシンボルとみなす信仰が世界で多元的に発生し，子安貝の利用が広く普及したのであろう。

J.G.アンダーソンは，子安貝は女性器を表象し生殖崇拝の象徴物であるというエリオット＝スミスの見解を引用しながら，次のように述べている［Andersson 1934：304–305，アンダーソン（松崎訳）1942：413～425］。

「日本では，子安貝は子どもの生誕と結びつき，この貝に子安貝という特別な名称を与え，妊婦は陣痛中これを掌の中にもっている（図287－8）。その一方，子安貝は女性のシンボルで生殖の象徴物であるがゆえに，死者葬送儀礼のさいに，死者が新たな世界における生存を確実にしてやるために，生命を付与する子安貝を贈った」と。



1 青海・柳湾992号墓

2 山西・天馬＝曲村6543号墓

3 和歌山・瀬戸

図 288　子安貝の副葬状態（矢印の位置）［青海省文物管理処考古隊ほか 1984，北京大学考古学系商周組ほか 2000，丹羽 1997］

沖縄では，妊婦が出産の時にお守りとしてタカラガイを握りしめる習俗が，20 世紀までのこっていた。タカラガイが子安貝の別称をもっているのは，子どもが安んじて生まれるようにという安産への願いに由来しており，名称としては子安貝のほうが古いのであろう。子安貝にそのような呪性があると信じられていたのは，開口部の形が女性器の形に似ているからである［長田 1982：77］。そして，その殻頂をこわすことが普通であるのは，破損した側からみると，女性器の形状により近くなるからである，という。

奄美では，女の陰部のことを貝（ミャー）という異名をもち，ミャーは呪詛する力があるとされている。貝が蓋をあけているところや一枚貝の上向きの形が女性器に類似しているからである。また，三角形も陰部とみなされ同じく呪詛の機能をもっていると考えられている［同前：77］。上黒岩岩陰からは三角形の装身具が 3 点出土している。

その一方，波照間島の近世の庸原第1墓では，子安貝1個を副葬した例の報告がある（図287－7）［西銘2003：2～3］。和歌山県田辺市瀬戸遺跡では，縄文晩期の屈葬した壮年女性の大腿骨付近から子安貝1個が見つかった例がある（図288－3）［丹羽1977：26～27］。子安貝の副葬というと，中国では新石器時代以来しばしば認められる習俗である。ここでは青海省柳湾の斉家文化の例と，山西省天馬―曲村の西周墓地の例を図示するにとどめる（同－1・2）。子安貝が貨幣としての価値をもって流通しタカラガイに転化するのは，商周代からであるけれども，一方では子安貝としての扱いを長くうけていた。

三角形といい子安貝といい，それを身につけることによって，邪悪を斥け自らの身を護ろうとすることに変わりはない。

以上のような事例にもとづいて，旧石器時代のヴィーナスが小さいのは握りしめる必要から生じたことであって，それは母神像であったこと，そして，握りしめるとすれば，赤ん坊ではなく，母親であるから，それは赤ちゃんを産むときを措いてほかには考えられない，と筆者は述べた［春成2008：68～69］。そして，上黒岩では石偶から子安貝へと安産の護符が変化していく，と推定した。三角形の装身具もまた性的三角形の象徴として，出産時の女性の身を護るために着けたのではないだろうか。

石偶や子安貝が出産と関係する呪物であるとすれば，上黒岩の岩陰は産所であり，そして墓地として使われることもあった複合的な生活の場であったのである。出土人骨28体のうちに成人が8体，のこりの未成人のうち8割を乳幼児が占めていた事実は，産育がたいへんであった当時の事情をよく物語っている。

（春成秀爾）

文献

アンダーソン，J.G.（松崎寿和訳）1942『黄土地帯』座右宝刊行会。
池田　等・淤見慶宏　2007『タカラガイ・ブック―日本のタカラガイ図鑑―』東京書籍株式会社。
江上波夫　1932「極東に於ける子安貝の流伝に就きて」『人類学雑誌』第47巻第9号，309～336頁。
―――　1970「東西交渉のあけぼの」『漢とローマ』東西文明の交流1，9～32頁，平凡社。
江坂輝弥・岡本健児・西田　栄　1967「愛媛県上黒岩岩陰」（日本考古学協会編）『日本の洞穴遺跡』224～236頁，平凡社。
長田須磨　1982「宝貝あそび」『えとのす』第19号，74～77頁，新日本教育図書。
忍澤成視　2000「縄文時代における貝製装身具の実際」『貝塚博物館紀要』第27号，1～24頁，千葉市立加曽利貝塚博物館。
―――　2001「縄文時代におけるタカラガイ加工品の素材同定のための基礎研究―いわゆる南海産貝類の流通経路解明にむけて―」『古代』第109号，1～76頁。
―――　2003「縄文時代の貝製装身具―素材貝はどこでどのように採集されたか―」『考古学ジャーナル』第503号，55～59頁。
―――　2007「縄文時代における房総半島の貝材利用の実態―千葉県市原市西広貝塚の貝製装身具の分析結果を中心に―」『動物考古学』第24号，25～52頁。
加藤　緑編　1997『ミクロネシア―南の島の航海者とその文化―』特別展図録，大田区立郷土博物館。
ギーディオン，S.（江上波夫・木村重信訳）1968『永遠の現在：美術の起源』東京大学出版会。
木下尚子編　2003『中国古代のタカラガイ使用と流通，その意味―商周代を中心に―』熊本大学考古学研究室・公開シンポジウム資料，熊本大学文学部考古学研究室。

木村重信　1982『ヴィーナス以前』中公新書 641，中央公論社。
———　1994『民族美術の源流を求めて』NTT出版。
木村英明　1997『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会。
黒坂禎二編　1999『妙音寺／妙音寺洞穴』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書，第 209 集。
品川欣也・及川　穣　2008「高知県不動ヶ岩屋洞窟遺跡第二次調査出土資料の再検討」『考古学集刊』第 4 号，81～96 頁，明治大学考古学研究室。
青海省文物管理処考古隊・中国社会科学院考古研究所　1984『青海柳湾』文物出版社。
中越利夫・佐々木正治・内山ひろせ　1998「帝釈弘法滝洞窟遺跡（第 12 次）の調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XIII，19～48 頁。
西沢寿晃　1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史』考古資料編，全 1 巻(2)，主要遺跡（北・東信），559～584 頁，長野県史刊行会。
西銘　章　2003「墓に伴う貝―近世墓出土の貝製品―」『南島考古だより』第 71 号，2 ～ 3 頁，沖縄考古学会。
丹羽佑一　1977「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査年報』1976 年，21～32 頁，京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会。
長谷部言人　1942「石器時代のタカラガヒ加工」『人類学雑誌』第 57 巻第 9 号，386～389 頁。
春成秀爾　2002「更新世末の大形獣の絶滅と人類」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 90 集，1 ～52 頁。
———　2007『儀礼と習俗の考古学』塙書房。
———　2008「上黒岩ヴィーナスと世界のヴィーナス」（小林謙一・国立歴史民俗博物館編）『縄文文化の起源を探る』40～72 頁，六一書房。
ビビコフ，S.N.（新堀友行・金光不二夫訳）1985『マンモスの骨でつくった楽器―旧石器人の生活と技術―』築地書館。
北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所編　2000『天馬―曲村』1980－1989，第 2 冊，科学出版社。
ボジンスキー，G.（小野　昭訳）1991『ゲナスドルフ―氷河時代狩猟民の世界』六興出版。
松藤和人　1994「東アジアの旧石器時代装身具」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ，17～40 頁，同志社大学考古学研究室。
ルロワ＝グーラン，A.（蔵持不二也訳）1985『先史時代の宗教と芸術』日本エディター・スクール出版部。
Abramova, Z.A. 1967 Palaeolithic Art in the U.S.S.R. *Arctic Anthropology*, Vol. IV, No. 1, pp. 1–179. Univ. of Wisconsin Press.
Асеев И.В. 1998 Аналоги в первобытном искусстве Сибири и Аляски на примере гравированных галек. *Гуманитарные науки в Сибири*. No. 3, с. 109–114, Иовосибирск.
Andersson, J.G. 1934 *Children of the Yellow Earth*. Kegan Paul.
Bahn, P.G. 1991 Pleistocene Images outside Europe. *Proceedings of the Prehistoric Society*, Vol. 57, Part 1, pp. 91–102.
——— 1998 *The Cambridge Illustrated History of Prehistoric Art*. Cambridge Univ. Press.
Bosinski, G. 1991 The Representation of Female Figures in the Rhineland Magdalenian. *Proceedings of the Prehistoric Society*. Vol. 57, Part 1, pp. 51–64.
Breuil, H. 1924 Notes de Voyage Paléolithique en Europe Centrale II, *L'Antothropologie*, Tom. 34, pp. 515–552. Paris.
Delporte, H. 1979 *L'image de la Femme dans l'art Prehistorique*. Picard.
Höck, C. 1993 Die Frauenstatuetten des Magdalenien von Gonnersdorf und Andernach. *Sonderdruck aus Jahrbuch Romisch- Germanischen Zentralmuseum Mainz*, 40, pp. 253–316, Taf. 25–31.
Jelínek, J. 1975 *The Pictorial Encyclopedia of The Evolution of Man*. Hamlyn.
Крупянко, А.А. и Табарев, А.В. 1996 Графика и пластика в искусстве каменного века Дальнего Восток. *Гуманитарные науки в Сибири*, No. 3, с. 68–72, Иовосибирск.
Leroi-Gourhan, A. 1968 *The Art of Prehistoric man in Western Europe*. Thames and Hudson.
Müller-Karpe, H. 1966 *Handbuch der Vorgeschichte*, Band I, Altsteinzeit. C.H. Beck.
Stuiver M., Grootes, P.M. and Braziunas, T.F. 1995 The GISP 2 delta 180 climate record of the past 16500 years and the role of the sun, ocean and volcanoes. *Quaternary Research*, Vol. 44, pp. 341–354.